世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『親切なパン屋さん』

第23話

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　椋露地　桂子

登場キャラクター（第二十三話「親切なパン屋さん」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジェシー
ガートルード
モリー

ジェームス
パン屋のおばさん
パン屋のおじさん
少女
老司祭
紳士
婦人
メル一家（ネズミ）

1

ミンチン女学院・屋根の上（早朝）

ミンチン女学院・屋根の上（早朝）、降り続く雨足。
天窓の僅かばかりの軒下に、びしょ濡れに羽を濡らした雀たちが、二羽、三羽、身を寄せ合って啼いている。

セーラの声がかぶる――

セーラの声「ごめんなさい、メル……」

2

同・屋根裏部屋（早朝）

ネズミの穴の前に、出て来て物欲しそうに二本足立ちしているメル――

セーラの声が続く――

セーラの声「そうやって、時々様子を見に来て呉れるけど、私、あなたたちにあげるパンクズひと切れも、持っては来られな

いのよ」

首を傾げるメル。

×　　×　　×

床に坐り、エミリーを抱いて話続けている青白い顔のセーラ――

セーラ「見ていたでしょう？　メル……私たち、この間ここで秘密のパーティを開いたのが見つかって……」

3　フラッシュ（第二十二話より）

愕然とドアを見るセーラ、ベッキー、アーメンガード、ロッティ――

仁王立ちで怒鳴るミンチン――

ミンチン「セーラ……お前には、明日、はっきりとおしおきする事にします……アーメンガード、ロッティ、部屋に戻るんです

！」

4

同・屋根裏部屋（早朝）

セーラ「あれから……私もベッキーも、ずっと食事を減らされているの……だから、メル、あなたたちにも、何ひとつ持って帰ってあげられないのよ……判って頂戴ね」

メル、怪訝に鼻をうごめかしたが、くるりと踵を返すと、振り返り、振返り、穴の中へ戻って行く――

ほっと吐息するセーラ――

その時、壁にノックの音――

セーラ、はっとベッドの壁に行く。

5

同・ベッキーの部屋（早朝）

ベッキー「お嬢様、お眼ざめですか」

隣りからノックの音――

6 同・屋根裏部屋（早朝）

セーラ「ええ……お早う、ベッキー……今、行くわ」

7 同・屋根裏部屋の前（早朝）

出て来るセーラの前に、ベッキーが来る。

ベッキー「（力のない声で）お、お早うございます、お嬢様……」

セーラ「どうしたの、その声……」

ベッキー「いいえ、おなかがすきすぎて、こんな声しか出ないんでございますよ」

セーラ「まあ……」

ベッキー「昨夜も、食物の事ばかり夢に出て来て、とても寝られる所では……」

セーラ「まあ、ベッキーったら……でも、本当云うと私もそうだったの」

ベッキー「（驚く）お嬢様も……」

セーラ「ええ……」

ベッキー「判りました……私、食物の入っている場所を知っています。なにか探してさし上げますから……」

セーラ「そ、そんな……ベッキー……」

8	同・台所（早朝）

入って来るベッキーとセーラ

ベッキー、早速戸棚を探しはじめる。

ベッキー「ええと、昨夜の残り物が、確かここらに……」

セーラ「やめて、ベッキー……私、なんとか我慢出来るわ」
ベッキー「（探し乍ら）いいえ、お嬢様が我慢されても、この私のおなかが云う事を聞かないんでございますよ……ええと、ここでもなし……」

その時、ぬっと入って来るモリー。

モリー「（怒鳴る）ベッキー！」

仰天して尻餅をつくベッキー――

ベッキー「うわ、びっくりしたァ！」

セーラも驚く――

セーラ「モ、モリーさん……！」
ベッキー「お、お早うございます……」
モリー「（ジロリ）フン、なにがお早うございますだよ。こんな朝早くから、一体なにをしようとしてたんだい」
ベッキー「いいえ、今朝使う食器はどこにあるかと」
モリー「とぼけるんじゃないよ……いいかい、私は、院長先生に、お

前たち二人を監視するよう、ちゃんと云いつけられているんだからね、勝手な真似しようったって、そうはいかないんだよ」

蒼然と顔を見合せるセーラとベッキー。

その時、ジェームスが大あくびで入って来る。

ジェームス「フワッフワッフワ……いやあ、昨夜食いすぎたせいか、気持悪くてしようがねえや」

吐息するベッキーとセーラ――

モリー「さあさあ、仕事がたまってるんだから、さっさと片附けるんだよ！」

セーラ「はい、モリーさん……」

9 同・二階の廊下

寝ていたシーザーが、大あくびで起上る。

――鳴り出す振鈴の音。

10 同・一階の廊下

振鈴を鳴らして行くアメリア――

×　×　×

教室のドアが開き、ミンチンが出て来る。

11 同・教　室

授業が終って、それぞれに大あくびするガートルード、

ジェシー――窓外の雨を見る。

ジェシー「あああ、なんとかならないの？　この雨」

ガートルード「三日も外出出来ないなんて、退屈で死にそうだわ」

ジェシー「ね、なにか気晴らしになる面白いことないかしら」

ラビニア「あるわ」
ジェシー「え……」
ラビニア「(微笑)セーラよ」
ガートルード「セーラ?!」
ラビニア「(頷く)あの子、おしおきで、ずっと食べる物を減らされている筈よ。私たち、昔のクラスメートとして、はげましてあげなくてはね」
顔を見合せるジェシーとガートルード。
ジェシー「わあ、面白そう」
ガートルード「行きましょう!」
三人、席を立つとドアへ――途端に、傍の机にいたアーメンガードの教科書がどっと床に落される。
アーメンガード「ああッ……」
ガートルード「あら、ごめんあそばせ」
三人、急いで出て行く――

教科書を拾い、心配そうにロッティと顔を見合せるアーメンガード――

12 同・一階廊下

来るラビニア、ガートルード、ジェシー。

ラビニア「(制して)シィッ……来たわ」

× × ×

地下の階段から、掃除の水バケツを重そうに運んで上って来るセーラ、よろめくようにバケツをおろすと、息をつく。

× × ×

顔を見合せるラビニアたち――

ジェシー「フフ、おなかがすいて、フラフラなのよ」

ガートルード「フフ、お気の毒ゥ……」

×　　×　　×

セーラ、ふっとラビニアたちに気づいて視線をむける——が、無言でバケツを持上げると二階への階段を昇りはじめる。

×　　×　　×

見送って顔を見合せるラビニアたち——

ラビニア「行くわよ」

ジェシーとガートルード、頷くと、三人そっとセーラのあとを尾ける。

×　　×　　×

教室から出て来て、怪訝そうにその三人を見送るアーメンガードとロッティ。

13 同・三階への階段

水バケツを両手に抱えて昇って来るセーラ――
その背後から、ラビニア、ジェシー、ガートルードがどっと駆け上って来る。

ジェシー「どいて！」
手摺側に避けようとしたセーラ、突きのけられた拍子に、抱えたバケツが手摺にぶつかり、どっとバケツごと手摺を越えて落下する

セーラ「ああッ……」

14 同・踊り場の下

書類を抱えて上って来るミンチン――
突如、その頭上から、水とバケツが落下して来る――

ミンチン「うわあッ……！」

15

同・三階への階段

その悲鳴に —— セーラの脇をすり抜けて駆け上ったラビニアたち、はっと立停る。

× × ×

咄嗟に、階段中途から駆け降りるセーラ。

× × ×

ラビニアたち、急いで手摺に寄り、見おろす ——

16

同・踊り場の下

階段の中途に、びしょ濡れになったミンチンが、何故かバケツを抱えて尻餅をつき、もがいている ——

ミンチン「だ、誰か……」

駆け降りて来るセーラ ——

セーラ「院長先生……！」

ミンチン「セーラ！……な、なんと云う事を……」

セーラ「す、すみません……」

その時、下から駆け上って来るアーメンガードとロッティ、アメリア――

アメリア「お、お姉様！」

ロッティ「セーラ・ママがやったんじゃないわ、ラビニアに決ってるわ」

17 同・三階の手摺

ラビニア、ぱっと翻ると、自室へ飛び込む。慌てて追うジェシーとガートルード。

18 同・踊り場の下

ようやくミンチンを抱え起すアメリアとセーラ

ロッティ「ほんとよ、私、ラビニアたちがいけない相談してるの聞いたもん、ね、アーメンガード」

アーメンガード「え、ええ……」

ミンチン「そ、そんなことは、どうでもよろしい。アメリア、早くモリーを呼んで頂戴」

アメリア「は、はい、お姉様……」

19 同・地下の作業場

ドアから顔を出して窺っていたベッキーが、パッと洗い場に戻る。

空のバケツを提げたセーラの腕を摑んで引込んで来るモリー、乱暴に突き放す。

モリー「全く、この雨続きだってのに、家の中で院長先生に水をぶち

まけるなんて、一体なんて事をするんだよ」

セーラ「す、すみません……」

モリー「院長先生はカンカンだからね、当分お前にはまともな食事はやれないから、そのつもりでおいで！」

モリー、出て行く

ベッキー「お、お嬢様……！」

20 同・ミンチンの居室

ベッドに坐り、毛布を頭からかぶったミンチンが、続けざまにクシャミをする。

ミンチン「プアクション、パクション、プアクショー！」

暖炉で、濡れた封書をかわかしているアメリア――

アメリア「お姉様……いま、暖炉に火を入れましたから、もうすぐお部屋があたたまりますわ」

ミンチン「そんな事はどうでも結構……大事なのは、その手紙です」

アメリア、その封書を見直す――

アメリア「市長夫人あてのお手紙ですのね」

ミンチン「ええ……市長夫人には、以前からこの学校の経営上の苦しさをお話してあります……市長夫人のお力添えで、なんとか慈善団体からの援助をお願いしたいと手紙を書いたのです……アメリア、かわいたら、その手紙を出して来て頂戴」

アメリア「え、私がですの?」

ミンチン「そうよ……他に誰がいると云うの?」

アメリア「でも……(と窓外を見て)こんなに雨が……」

ミンチン「雨が降ってる事ぐらい、三日前から知っています……」

アメリア「あの、私、風邪気味なので……セーラさんに頼んではいけないでしょうか」

ミンチン「セーラ……?」

ミンチン、ふっと考えたが、ニヤリと頷く――

ミンチン「そう、セーラね……いいことよ……あの子には、この雨の中で、たっぷり思い知らせてやる必要がありますからね」

アメリア「お、お姉様……！」

21 同・地下の作業場

その封書をセーラに渡すモリー――

モリー「いいかい……院長先生の大切なお手紙なんだからね……お前はずぶ濡れになったたって、濡らすんじゃないよ」

セーラ「はい、モリーさん……」

22 同・表

使用人階段の下に出て来るセーラ、手にしたボロ傘を開く――

骨は折れ、布地は破れている。

心配そうに、背後に顔を出すベッキー。

ベッキー「お嬢様……」

セーラ、振返る――

ベッキー「こ、こんな雨の中を……食べる物も食べさせないでお使いに出すなんて、いくらなんでもあんまりです……（泣顔）」

セーラ、淋しく微笑する――

セーラ「大丈夫よ、ベッキー……私、まだ、こんな事では、倒れたりはしないわ……心配しないで」

セーラ、ボロ傘をさして、階段を表の路上へと昇って行く

ベッキー「お、お嬢様……」

泣顔で見送るベッキー――

（中　CM）

23

路上

雨足に、ぬかるんでいる。

道をいそぐ人々の足にまじって、穴のあいた小さなボロぐつがゆく。

セーラである。

破れた傘で、しっかり身を守るようにして、必死に歩くセーラ。

だが、雨や風は、容赦なく、そんなセーラのからだをぬらしている。

思わず、身をふるわすセーラ。

ふと気がつくと、ちょうどそこは、レストランの前である。

ガラスの向こうに、楽しげな人々の談笑と、暖かそうな料理の数々が並んでいる。

いつの間にか、立ちどまって見ているセーラ。
通りがかりの人が、そんなセーラをうさんくさく見ている。
セーラ――。
はっと、我にかえり、全身から火が出るような恥ずかしさに襲われる。

セーラのⓂ「いけない！　少しぐらいおなかがすいたからって、そんなこと我まんできないようでは、天国のお父さまに笑われてしまうわ」

いそぎその場を離れるセーラ。

×　　×　　×　　×

ぬかるみに、足をとられそうになりながら、それでも必死に歩く。

×　　×　　×　　×

くじけそうになる自分を勇気ずけるように、心でしゃべ

りつづけるセーラ。

セーラのⓂ「そうだわ、こんな時は、何か楽しいことを想い出すことだわ、そう、インドのことが良いわ、暖かい太陽がいつもふりそそいでいたあのインド、そうして、いつももぎたての果物やパンが……（気づく）駄目だわ、どうしても食物の事を想い出してしまって……そうよ……もしも、私に今銅貨一枚あったら、焼きたてのぶどうパンが買えるのに……」

突然、はっと黙りこんだセーラ。

そして、足もピタッと止まっている。

その足の先――。

一枚の銀貨が落ちている。

四ペンス銀貨だ。

セーラ――。

じっと、その銀貨を見た。

24 通り

人々や、馬車が、雨の中をいそぐ。

25 もとの路上

雨足。

そして行き交う人々の足が、容赦なく例の銀貨をふみつけていく。

セーラの足が、そっと動く。

一歩、二歩……。

そしてセーラの手が、そっと銀貨をひろう。

セーラのM「銀貨だわ……それも四ペンスもの」

ひろった銀貨を手に、セーラ、周囲を見る。

だが誰れも、そんなことなど気にもとめないで、いそが

しく通りすぎていく。
セーラの目が、ふとくぎずけになる。
目の前に、パン屋のウィンドーがある。
ちょうど、パンが焼き上ったところらしく、おかみさん
らしい人が、やまもりに抱えてきたパンを、ウィンドー
に並べている。
それは、湯気のたったブドーパンである。
セーラ――。
我にかえる。

セーラのⓂ「いけないわ、これは、きっと誰れかが落としたものなの
よ。それを、黙ってつかっては……」
セーラ、思いをふっきるように、ちょうど通りかかった
婦人に、

セーラ「あの、これを落としませんでしたか？」
と、銀貨を見せる。

婦　人「（素っ気なく）知らないわ」
行ってしまう。
紳士が通りかかる。
セーラ「あの、これ、落としませんでしたか？」
紳　士「知らんね」
手をふって行きかけ、ふと、
紳　士「どうしたんだ？」
セーラ「ここに落ちてたんです」
紳　士「なんだ、だったら、拾っとけば良いじゃないか」
言うと、行ってしまう。
セーラ、手の中の銀貨、思わず握りしめる。

26	パン屋の店先

「いらっしゃい！」

と、ふり返った、例のおかみさん。
?……と見る。
薄汚ないなりのセーラが、静かに入ってきたのだ。
おかみさん、そんなセーラを、ちょっとけげんに見るが、
すぐ人の好さそうな笑顔になって、
おかみさん「何にします?」
セーラ「(きて)いえ、パンを買いにきたのではないんです」
おかみさん「?」
その目の前のケースの上に、例の銀貨をそっと置くセーラ。
セーラ「これが、お店の前に落ちてたものですから……」
おかみさん「(びっくりしたように)それで?」
セーラ「きっと、こちらへ見えたお客様が落したのではないかと思って」
おかみさん「それで、わざわざ届けてくれたのかい」

セーラ「ええ、落とした方が、お困りになってるのではないかと」

　　おかみさん――。

　　セーラを、つくづくと見る。

　　やがて、

おかみさん「そりゃ、あんたのものだよ」

セーラ「え？」

おかみさん「その四ペンス銀貨がね、あんたに拾って欲しいって、わざわざそこに落ちてたのさ」

セーラ「そんな……」

おかみさん「（笑顔で）あんた、おなかがすいてるんだろ？　かまわないから、そのお金でなにか買っておあがり……うちのパンでよかったらどっさりお負けしてあげるよ」

セーラ「い、いえ……いいんです……」

　　首を振り辞退するセーラ、その儘表へ後退って出て行く

怪訝に見送るおばさん――

27 同・表

再びボロ傘を開げ、途方に暮れるセーラ、ふと何かを思いつくと一方へ歩き出す。

28 ある小さな教会の前

例の、セーラが買物の途次に通る教会である――

セーラ、来て、みつめたが、その入口に入って行く――

29 同・教会の中

怪訝にセーラを見る例の老司祭――

老司祭「ほほう、拾ったそのお金を寄附したいと云われるのじゃな」
セーラ「はい……どうしても落した人が見つかりそうもないので、それで……」
老司祭、濡れた貧し気なセーラを見おろすと、
老司祭「いや、落された方は、判っておる」
セーラ「え……」
老司祭「それは、きっと神様じゃよ」
セーラ「神様……?」
老司祭「(頷く) 神様が、あなたのような心の美しい方に、おさづけになったのじゃ……」
セーラ「そんな……」
老司祭「神様に遠慮は無用じゃ……さ、それでなにか買ってお食べなさい……それが一番神様が喜んで下さる事じゃよ……」
セーラ「司祭様……」
微笑で頷いてみせる老司祭 ――

30 同・表

茫然と出て来るセーラ、手の中の四ペンス銀貨を見直す
—— 思い切って歩き出す。

31 パン屋の表

来るセーラ、ふっと立停る。
ウィンドーの前に、ビショ濡れて窺いているセーラより
少し年下の貧しい少女の姿。
セーラ、そっと近づく——
少女、気配に、はっと振向く——
セーラ「あの……あなた……おなかがすいているのじゃなくて?」
少女、微かに頷く——
少女「……すいてる……とても……」

セーラ「お昼は？」
少　女「（首を振る）食べてない……朝だって昨夜だって……」
　　　　セーラ、そっと少女を見直す――
　　　　貧しい衣服、靴もない泥の裸足――
セーラのM「この子は、私より、もっとおなかをすかせているんだわ、
　　　　きっとそうに違いないわ」
　　　　セーラ、優しく少女に話かける。
セーラ「ちょっと待っていてね」
　　　　セーラ、店の中へ入って行く。

32　同・店内

　　　　入って来るセーラ――
　　　　顔を向けたおばさんが、微笑する。
おばさん「まあ、矢っ張り戻って来てくれたんだね」

セーラ「え、ええ……そのブドウパンを四ペンス分下さい」

おばさん「判ったよ……いま焼きたてを入れてあげるからね」

おばさん、湯気の立つブドウパンを袋に入れる。

おばさん「さ、本当は四ペンスで四つだけどひとつおまけしといたからね」

セーラ「有難う、おばさん」

セーラ、銀貨を渡すと出て行く。

じっと見送るおばさん――

33 同・表

出て来たセーラ、期待の表情で待っている少女に近づく。

セーラ「さ、あたたかいブドウパンよ」

驚く少女

セーラ「(微笑)心配しないで……私もひとついただくわ」

袋から一つ出すと、残りを袋ごと渡す。

セーラ「さ、どうぞ……」

受取った少女、ブドウパンを掴み出すとむさぼるように頬張る――

少　女「お、おいしい……！」

セーラ「（微笑）よかった……さ、それは全部あなたの分よ……じゃ、元気でね」

セーラ、雨の中へ歩き出す。

ブドウパンを手に、茫然と見送る少女。

34　同・店　内

ウィンドの蔭で見守っていたおばさんが、驚いて亭主と顔を見合せる。

おばさん「なんてこったろう……あの子ったら、表にいるあの子にみ

んなパンをやっちまったんだよ」

亭　主「ふうむ、判らねえなあ、あんなにやせ細って青い顔してるのに、なんだって他の子にまで恵んでやっちまったんだろう」

35　同・表

じっとセーラを見送っている少女――店から傘をさして小走りに出て来たおばさんが、

おばさん「ちょっと、あんた……」

はっと振返る少女――

おばさん「あの子は、あんたにいくつパンをくれたんだい」

少　女「……四つよ」

おばさん「じゃ、矢っ張り、自分はひとつだけしか取らなかったんだね……ほんとは、全部だって食べられる程、おなかをすかしていたんだろうに……（泣く）全く天使みたいな子だよ」

脅えておばさんを見る少女――
おばさん「いいんだよ、あんたはそれを全部食べても……」
少　女「ほんと……」
おばさん「(頷く)まだ、おなかがすいてるかい」
少　女「(首を振る)さ、さっきほどじゃないわ」
おばさん「よかった……さ、お店の中へお入り、濡れた服をかわかしてあげるよ」
少　女「あ、ありがとう……」

36 ミンチン女学院・屋根裏部屋(夜)

床に坐ったセーラが、壁穴の前に集ったメルー家に、ブドウパンのかけらを分けてやっている――
一緒に、自分もひとかけら食べるセーラ。
セーラのN「その夜、私は、とても満たされた思いでした……例え僅

かなパンでも、あの少女や、メルの一家たちと分け合えた事で、私のおなかは、充分に満足だったのです……」

（第二十三話　終）